

# 『住吉物語』論

——成田本・契沖本を中心に——

豊 島 秀 範

## 一、はじめに

『源氏物語』の螢の巻で、玉鬘が、

住吉の姫君の、さし当たりけむをりは、さるものにて、今の世のおぼえもなほ心ことなめるに、主計頭が、ほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなずらへたまふ。(日本古典文学全集『源氏物語』三一〇二)

と、我身の九州での体験と比較して読んでいる場面を設定し、その当時の世評もなかなかであると紫式部が記述する源となった『住吉物語』とは、果たしてどのような内容のもので、現在のどの伝本に相当するものであろうか。

藤井本・成田本などを中心とした伝本が、おそらく古い本文を伝えているであろうとの推測が今日では支配的である。だが、百本に及ぶ伝本が有るとされるその僅か二十数本を読み得たに過ぎない段階ではあるが、古態を留めるとされる藤井本と成田本との間にも、本文の差異は決して少なくはない。

前回の拙論「住吉物語『契沖本』の系譜上の位置」(注1)において、中将が宮姫君を探し求めて住吉に下る場面を中心としながら、契沖本が、藤井本・成田本と密接な関係を保っていること、及び、それ以後の改作本の本文に大きな影響を与えている事について述べてみた。これら三系統の本文以外にも重要な伝本はあろうが、やはりこれらの三本を中心に据えて他の伝本との比較をしてゆくことが、目下のところ最も適切な方法であると思われる。そこで、以下、『住吉物語』の

最後の場面である、父大納言が姫君と再会した以降の記述を比較しながら、それら諸本の位置関係について、特に成田本・契沖本を中心に論じてみたい。

## 二、大納言・姫君の再会以降の場面一覧

大將と姫君との間に生まれた姫君の装束の儀式に腰結の役目を仰せつかった大納言が、帰りにかつて姫君の装束に際して着せた小桂を貰ったのがきっかけで、不審に思った大納言が大將の家に行き、姫君と再会を果たした。そこで姫君・侍従・大將などから、姫君に加えられた継母の策謀のすべてを初めて聞き知り、大納言は驚く。ここで取り上げるのは、その後帰宅した大納言が継母と語る場面から、物語が相貌の変化を最もあらわにする最後までの部分である。

その主な場面を簡条書きにすると、

- ①大納言、姫君が発見されるに至った経緯を語る。
- ②中の君の喜び。
- ③大納言、継母から去り、故宮の三条堀川へ移る。
- ④大納言、大將の叔母・対の君と結婚。
- ⑤人々、継母を疎み、去る。
- ⑥閑白、姫君が大納言の娘と判り喜ぶ。
- 7 大將・大納言、昇進。
- (8)兵衛すけ、中の君を去る。姉妹の嘆き。

(9) 姫君、中の君・三の君を大将邸に迎える。  
 (10) 大将、閑白となり、若君元服する。  
 (11) 大将と姫君との娘、女御となる。  
 (12) 侍従、内侍となる。  
 (13) 継母、人々に疎まれ、ついに死亡。  
 14 継母の供養をする人がいない。  
 (15) はせ観音の御利益。  
 (16) 人々に情あるべき事を説く。  
 以上のストーリーが続く。○印の数字はほぼ全ての諸本にある場面、( )印は共通する場面はあるものの、変化が相当に激しいこと、無印の数字は、諸本間に殆ど共通する場面が無く、記述が様々に分かれている事を、それぞれ示す。

この簡条書きで判るように、ここで取り上げる部分に於ては、後半の7場面以降の本文に激しい改作が認められる。その様子を更に詳しく一覽したのが次に掲げる「表」である(表中の○印は本文がほぼ共通のもの。△印は本文に多少の異同があるもの。▲印は異同の激しいもの。無印はその部分の記事が全く無いことを示す。また、各伝本名の後に付した( )内の数字は、桑原博史氏による諸本の分類を目安として示したものである(注2)。また、数本の伝本が共通する場面を有している場合は、煩瑣を避けて一括して印を付してある。場面の記述の冒頭に・印を付したものは、それぞれの場面の中で、比較的諸本に共通する重要な構成要素であることを示している。諸本の出典については(注3)に記しておいた)。  
 以下、「表」を用いながら、それぞれの場面を追う形で、諸本の関連を考えてみたい。

(1)大納言、継母に語る															成田本(1)	
															藤井本(1)	
															契沖本(4)	
															大阪中之島本	
															古活字十行本(4)	
															益田本	
															住吉神社本(2)	
															香取神社本(4)	
															書陵部本(4)	
															国会本(1)	
															京都本(1)	
															光蓮寺本	
															浅野本	
															清水本(1)	
															御巫本	
															徳川家本(1)	
															岩瀬文庫本(1)	
															東京教育大本(3)	
															横山本(4)	
															真銅本(6)	
															野坂本(6)	
															白峰寺本(5)	
															神宮文庫本(4)	
															陽明文庫本(5)	
・ 対の君発見	○				○											
命は長くあるべきものだ																
・ あやしき法師と共に	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
・ 東山に居た	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ただ憂きは永らふべくもなし			○													
憂き世に永らふべきものぞ	○															
人ほどとうましきものは侍らぬ																
・ 継母喜び、話を催促	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
・ うとましき人の策略	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
																</

—

・人々、三条へ集まる	△	成田本(1)	
	○	藤井本(1)	
		契沖本(4)	
	○	大阪中之島本 古活字十行本(4)	
		益田本 住吉神社本(2)	
		香取神社本(4)	
		書陵部本(4)	
	○	国会本(1)	
		京都本(1)	
	○	光蓮寺本	
		浅野本	
		清水本(1)	
	○	御巫本	
		徳川家本(1)	
		岩瀬文庫本(1)	
		東京教育大本(3)	
		横山本(4)	
	○	真銅本(6)	
		野坂本(6)	
		白峰寺本(5)	
		神宮文庫本(4)	
		陽明文庫本(5)	
(4)大納言、結婚する			
・大納言、一人住みは不都合	○		
・大将の叔母・対の御方と結婚	○		
大納言、昔より榮える	○		
大納言の所へ人々集まる			
(5)人々、継母を去る			
・継母の女房達、大将の上へ集まる	○		
・心寄せの式部、厚遇される	○		
(6)関白の喜び			
・関白、姫君が大納言の娘であることを知る	○		
・願ってもない事と喜ぶ	○		
他の人々も羨む	○		
関白に若君・姫君ができる			
関白・大納言ともに繁盛			
(7)大将・大納言、昇進			
中将、大将となる			
大将、内大臣となる			
あぜち大納言、大将となる			
(8)兵衛すけ、中の君を去る 姉妹の嘆き			

—

[illegible]

[illegible]

[illegible]



大納言が継母に語るこの(1)の場面は、どの諸本にも大きな異同はない。それは、この部分が物語のクライマックスの一つであったことに起因している。それでも、「表」を細かく見ていくと判るように、諸本間に多少の相違はある。その中で注目すべきは、成田本・藤井本が、僅かずつではあるが、他の諸本にも例の少ない記述を持っている点である。岩瀬文庫と徳川家本とにある、

人ほどうとましきものは侍らぬ（徳川家本）

はそれぞれ記述としては孤立しており、岩瀬文庫本の他には類例のない特殊な表現である。だが、印のない残りの三か所の記述は類似表現である。ただし、成田本と藤井本とは意味上で対立している。すなわち、

[illegible]

・まことに怪しの法師にくして、ひむかし山におはしけるとて、たゞ憂きは永らふへくもなしとて、（藤井本）

とあって、憂き世に生き永らえる事を、成田本では肯定し、藤井本では否定しているからである。成田本と同趣の記述を持つ本文には、

・まことにいやしき法師にくして、ひかし山におはしけり、たゞ憂き世には永らふへき物こそ、とのたまへは、（書陵部本）

・まことに怪しき僧にくして、ひんかし山におはしけりとて、たゞ憂き世に永らふべきものぞ、とありければ、（御巫本）

などがある。一方、藤井本と同じ内容を持つ伝本には、

・まことに怪しの法師にくして、東山におはしけるとて、只憂きは永らふへくもなしとて、(古活字十行本。他に大阪中之島本・益田本・住吉神社本・香取神社本なども同趣の本文を持つ)

・そこへの給ひしやうに、ひんかし山のくち法師にくして、をはしけるにこそ、たゞ憂き世には永らへぬそよき、との給へは、（真銅本）

などがある。

一瞬、継母に歓喜の心を抱かせ、次の瞬間に陥る落胆との落差の大きさを考慮

すれば、藤井本系統の本文も成立する。一方、姫君に再会し得た大納言の喜びを素直に表現するとすれば、成田本などの表現がふさわしい。事実、それぞれの本文を持つ伝本が存在しているのであり、そのいずれかに『住吉』の原形を直ぐに求められるものではない。また、僧・法師の表現や、その形容詞からの判断も不可能なほど、表現が混然としている。

ただし、姫君が東山に怪しい法師といったとする語り出しと、大納言の話を受けて身乗り出す継母の状況からして、姫君との再会を素直に喜ぶ大納言の言葉は、ここでは相応しくないように思われる。勿論、継母のその態度も、大納言の話に合わせた演技ではある。しかし、継母の演技は認められたとしても、「まことに怪しき僧にくせられて、ひんかし山におはしけりとて」を受けて、「たゞ憂き世に永らふへきにそありける」という大納言の心情の吐露は、文脈上、落ち着いていない。そこで、

大納言帰りに給ひて、姫君にこそ尋ね合ひて侍れ、まことに命は永くあるべき物なり、と仰せければ、(中略)怪しの法師に具してあり、など聞ゝつる事の恨めしさよ。いかばかりの事のありつるを、神ならぬ身とて、知らざりける事の口惜しさよ。(横山本)

と、他の諸本では傍線部「まことに」の直前にも記されていた「怪しき法師」の表現を省いて、前後の文脈を整え、不自然さを消した記述が生まれることにもなる。横山本の改作の激しさから考えて、これは当然有り得る方向である。

以上のように考えてくると、憂き世を否定した藤井本系統の本文が適当ということになる。だが、まだ問題は残る。一点は場面の後半にあつて他の諸本の殆どが有している「大將の若君・姫君は大納言の孫であつたこと、そして大將が大切に育てている」という記述が、藤井本には無いことである。もう一点は、憂き世の肯定・否定について全く記述の無い契沖本を初めとする諸本が少なくないことである。

大納言の孫の若君・姫君について触れていない伝本には、大阪中之島本・岩瀬文庫本がある。岩瀬文庫本は「表」に示したそれ以下の陽明文庫本までの諸本と

共に大幅な改作が認められる伝本であるため、あまり重要とはならないが、大阪中之島本は古活字十行本などと共に注目すべき本文を持っている。その大阪中之島本が藤井本と全く同じ記述を持っているということは、両本の密接な関連を物語ると同時に、藤井本からこの部分の本文が欠落したものとする安易な判断を拒むことにもなっている。この部分を除けば、藤井本は古活字十行本以下の諸本と同じ構成を持つということ、住吉物語に於ける藤井本の存在は依然重い。ただ、大阪中之島本以外には藤井本と同趣の伝本がこの「表」に掲げた限りでは認められないこと、かつ、記述のない若君・姫君は、今後の展開の中で不可欠な人物であることから、この(1)の場面に関しては、藤井本は若干の欠点を持った本文であると言ふべきである。

もう一点の、契沖本に關してであるが、契沖本は国会本・京都本・白峰寺本とはほぼ同様の記述を持ち、この(1)の場面に関しては、一見するところ、枝葉を削いだ最も基本的な内容によつて構成されているとも考えられる。しかし、

誠に怪しの法師にくして東山におはしける、と有りければ、(中略)美しき若君姫君をよそに見しに、我孫にて有けるそやとて、怪しの法師にくしてありしに、よく／＼聞き給へ、との給へは、(契沖本)

と、憂き世の是非を記さない契沖本の文章が、果たして元の姿なのか、それとも、美しき若君姫君といひてよそに見しも、我がこにておはしけるにや、怪しき僧に具せられてとの給しに、大將とのゝまたなきものに思ひかしつき給へるぞ、よく／＼聞き給へ、との給へは(成田本)

とある成田本の傍線部Bなどが省略されたものであるうか。傍線部AとBとは、いずれも姫君の様子を言っているのだが、Aの部分とは対照的に、姫君を大切にしている大將に視点を置く傍線部Bの表現は、直後の「よく聞き給へ」と充分に呼応したものとなっている。それに対して、Bの記述を持たない契沖本は、文脈に不自然さがある。あるいは、契沖本の傍線部「怪しの法師にくしてありしに」は、助詞の脱字なども想定されようが、二回目の記述をもって強調される契沖本の「怪しの法師」の表現は、ほぼ同様の本文を持つ藤井本・古活字

十行本その他の諸本ともども、やはり唐突な感じは免れない。成田本のBの記述は、憂き世に永らえることの肯定と関連して浮上したものはあるが、この部分においては、契沖本に比べて成田本の本文の優位性が確認される。なお、成田本の「我がこ」は「我がまこ」の脱字であらうか。

先にも述べたように、住吉物語の末尾部分で物語が多岐に分かれるのは、姉妹の嘆きや継母を疎む心情、はせ観音の御利益を説く上での人の情に重点が置かれていたからである。ここでの憂き世の肯定・否定というのも、まさにその延長線上にあると考えることもできよう。それらの要素を含んでいないという点では、契沖本の存在は意味を持っており、住吉物語の姿の一側面を示しているのかも知れない。以下、場面を追いつつ、更に検討を加えてみよう。

#### 四、中の君、姫君の無事を喜ぶ。大納言は三条堀川へ移る

姫君の無事を喜び、無情な行為をした母を疎む中の君の様子を描く(2)の場面と、大納言が故宮の邸・三条堀川へと移る経緯を語る(3)の場面には、藤井本・成田本・契沖本の三本の位相が象徴的に現れている。

概観的にまず言えば、(2)場面では、成田本と契沖本とが緊密な関係にあることが認められ、(3)場面では藤井本と契沖本とが同趣の本文を持っているのである。

つまり、契沖本を中心に三本がいわば三つ巴になっている。前稿で指摘した契沖本の本文質が、ここでも顕著に示されていると言える(注4)。

(2)の場面から、多少詳しく論じてみよう。三本の表現を記してみると、

・中の君、平らかに**A**おはしましける事Bの嬉しさよ、とて喜び、あはれ／＼とく見奉らはやとて、親なからも疎ましくと思されける。(藤井本)

・中の君・三の君これDをきゝて、さても平らかに**B**おはしける事Cの嬉しさよ、あはれ／＼とく見奉らはや、親なからもに／＼、疎ましくと思えける。(成田本)

・中の君・三の君、対の御方さやうにておはしましける事Cの嬉しさよ、とて喜び、とく見奉らはや、親なからも疎ましくと思されける。(契沖本)

とあって、三本とも殆ど同じ内容で構成されていることが知れよう。しかし、更

に細かく見てゆくと、この三本に限ってもその関係はなかなか容易には判断できないところもある。

C・Dの表現を比べると、Cの部分では契沖本に、Dでは成田本に若干の変化が有るものの、ほぼ共通した表現範囲と見ることができ。ところが、Bの箇所では契沖本が異質な記述を有し、Aでは成田本と契沖本とが、藤井本とは明確に異なる表現姿勢を取っている。「中の君・三の君」と「中の君」という表現の違いは、単なる添削という事に留どまるものではなく、伝本それぞれの改作姿勢に関わるものであって、中の君を据えるか、三の君の行為も含めるかで、作品内の人物像が変化してくるのである。この点に関しては以前に述べた事があり、内容が多岐に渡るので、ここでは触れない(注5)。

ただし、「表」を一覧すれば判るように、ここでは、(2)の場面を持たない伝本に徳川家本・岩瀬文庫本・神宮文庫本・陽明文庫本があること、また、成田本・契沖本以外にも姉妹両者の行動として描いている諸本に浅野本・清水本・東京教育大本・横山本・真銅本・野坂本などがあって、必ずしも少ない伝本数とは言えないのだが、以上に記した徳川家本以下の諸本は、今回取り上げる物語部分については改作の手が相当に入っている本文と考えられるので、それらから判断すると、この(2)の場面は、藤井本を初め古活字十行本以下の諸本が有している「中の君」一人の心意として描写している表現が相応しいように思う。逆に、変化の激しい諸本から藤井本などが生じたとは考えにくく、藤井本などに関連の深い表現を持つ契沖本などが、浅野本以下の諸本の改作に際して影響を与えた、という推測を許すことになる。

続いて、大納言が継母のもとを去って、故宮の三条堀川邸に移るまでの(3)場面に入ると、「表」で判るように、成田本以下香取神社本までの諸本が、ほぼ共通した本文を有しているのに対して、書陵部本以下陽明文庫本までの諸本は、東京教育大本・横山本・真銅本・野坂本を筆頭にして極めて多岐に変化している。その中であって御巫本は藤井本などの諸本と殆ど同じ本文を持っている点が注目される。その他の諸本の多くは、藤井本などのグループに近似した本文を保持して

はいるのだが、場面を細分して比較した時に、微妙に異なるプロットを含んでいるのであって、その様相は「表」を見ることで理解することができる。他の諸本には無い孤立した記述を持つ清水本・岩瀬文庫本・白峰寺本・神宮文庫本・陽明文庫本などは、いかに場面が変化して行くかという点を考える上で示唆に富むが、ここでは成田本から香取神社本までの諸本を中心に論じてみたい。

成田本以下香取神社本までの八本を一覧表で比較すれば直ぐにわかるように、この中では(3)場面後半の成田本の二箇所が異同が目につく。まず成田本によって、大將が大納言の移転に反対する場面から、本文を引用してみよう。

・大將、この由をきゝ給て、急ぎ帰り給へと、くかく聞こえ給へは、  
大納言、さることにてははんへれとも、あさましく惑ひありく人お取り置き

て見せさせ給ことは、この世ならすいかにも忘れ難き御事にこそはんへるに、  
かやうにの給ことは、まことに否み難くはんへれとも、これはかりは背き奉  
らんとて、きゝ給はす。

・姫君も侍従も、とかくなため給へと、きゝ給はす、たれくも聞こえかねて、  
(2) 旅所なれはとて、三条えさまぐの物とも送り給けり。

・人くもまいり集まりければ、その昔にも違はず、豊かなる様也。(成田本)  
右の引用文で、成田本が他の諸本と異なる部分は、傍線部(2)・(3)の箇所であ  
る。比較の為に藤井本の本文を示してみると、

・姫君も、まめやかにく留め申し給へとも、聞入れ給はて渡り給ければ、  
・三条へさまぐの物とも奉り給て、

・人くも、まいりあへり。(藤井本)

とあって、傍線部(2)の表現から「侍従」の名が消えている。更に、傍線部(3)では成田本にある後半の表現が無い。これは藤井本を初め、契沖本以下の総ての諸本に共通している。姫君に付き添っている侍従の意見を加え、大納言の三条堀川での生活に彩りを与えようとする成田本の改作姿勢が浮上するものと見てよいであろう。勿論、この箇所の記述をそっくり欠落している伝本も少なくないことは、「表」を一瞥すれば理解できるのだが、逆に記述の有る伝本も多いわけで、藤井

本・契沖本を初めとする諸本に、住吉物語の本文の姿を認めておいてよからう。  
ところで、傍線部(1)の表現であるが、例えば、藤井本では次のようにある。

大納言殿、申されけるは、あさましく惑ひありきけむ者を取り置き給て、見せ  
給へは、この世ならすくひをめす共、いなみとも思ふへきにあらす、(藤井本)

右の傍線部の意味が充分には判らない。「くひ」は「くい(悔い)」であろう。  
北の方(継母)との離別が後悔することになるかも知れないということか。だと  
すれば、「めす」の尊敬表現が不可解だ。契沖本の記述はどうか。

大納言、申されけるは、あさましくも惑ひありきけん物を取出し給て見せ給  
へは、此世ならす思めすとも、いなみ思ふへきにあらす、(契沖本)

この表現だと、大將が大納言に対して、(姫君を救い、世話をしている)大將の  
勧告を拒否したことで、例えどのようにお思いになろうとも仕方がない、という  
解釈ができよう。ただし、姫君を妻として処遇してくれている大將に対して、素  
直に感謝している大納言の気持ちが見えられていた成田本の記述とも異なること  
になる。つまり、住吉物語の中心的な伝本と目されているこれら三本の表現が、  
総て異なっているということだ。

そこで、この部分の記述を持っている他の伝本と比べてみたい。

まず藤井本と全く同じ表現を有している伝本には、大阪中之島本・古活字十行  
本・益田本・住吉神社本・香取神社本のグループの諸本がある。これらの諸本が  
藤井本と記述が一致しているということは、注目すべき事実である。先述したよ  
うに、藤井本の表現は決して理解しやすい記述とは言えない。にも拘わらず、こ  
れら五本の伝本に全く共通の表現があるということは、その五本のグループの伝  
本関係の近さを示すと共に、藤井本の影響力の強さという点を認めておきたい。

藤井本に代表されるこれらの諸本に近似した記述を持つ伝本は契沖本なのであ  
るが、契沖本と同じ記述を有する伝本は、今のところ見当たらない。

ところで、大まかな内容として成田本に類似した本文を持つものとしては、書  
陵部本・御座本・神宮文庫本などを挙げることができる。しかし、それとても細  
かく見てゆけば微妙に異なっている。以下に引用してみよう。

・大納言、あさまし惑ひ給つる物を、取り置きて見せ給ふ事は、この世ならす嬉しく侍れとも、(書陵部本)

・あさまし惑ひありきける人を、取り置きて見せ玉へは、この世ならす嬉しく思ひ奉れは、くひを召すとも、いたみと思ひ侍らねとも、(御巫本)

・さやうにありきけん娘を取りて、たいらかにをかせ玉ひ侍るは、この世ならす思ひ玉へれとも、(神宮文庫本・陽明文庫本)

右の三種類のうち、「いなみ」が「いたみ」とはなっているものの、御巫本はまだ藤井本・契沖本に近い表現を保っていると言いうことができる。ただし、藤井本・契沖本が、

・この世ならすくひをめす共、(藤井本)

・此世ならす思めすとも、(契沖本)

であったのに対して、御巫本では、「この世ならす」が「嬉しく思ひ奉れは」を修飾しているという点で、成田本と同趣の解釈が施されていると理解すべきであろう。書陵部本もそれは同様である。

しかし、それでもまだ、「この世ならす」が誇張表現と感じられたのであろうか。白峰寺本に於いては、

大納言のたまふやう、姫君いつくとも知らず失せにしを、取り置かせ給ひて見せ給ふ嬉しさは、申し尽くし難く侍れ共、(白峰寺本)

と、極めて無理のない表現が採られているのである。難解な本文が必ずしも古態の表現を保っているというふうには考えていないが、やはり御巫本・書陵部本さらに白峰寺本には、合理的な解釈が為されているように思われる。その点では御巫本・書陵部本の二本は成田本の記述に近く、かつ、神宮文庫本・陽明文庫本の本文とも近い記述姿勢であると言える。そして更に、無理のない表現へと思い切った改作を施しているのが白峰寺本であった。

以上、(3)場面について主な伝本に見られる本文の異同を見てきたのだが、再度その違いを振り返ってみると、記述が様々に変化する契機の一つは、契沖本の「此世ならす思めすとも」の記述にあった、と考えることができる。つまり、(2)

(3)の場面においては、契沖本が諸本の異同のカギを握っているということである。

## 五、大納言の結婚。関白は姫君の素姓を知り喜ぶ

(4)大納言の結婚・(5)人々継母を去る・(6)関白の喜び・(7)大将・大納言の昇進と続く四つの場面へと目を移そう。

〔表〕により全体を概観すると、(7)大将・大納言の昇進の記述は、諸本により大きく異同のあることがはつきりしており、その場面の記述は国会本・京都本・光蓮寺本・浅野本・横山本のみにあつて、横山本を除く四本は類似した本文関係に有ることも知り得る。ただし、成田本から香取神社本までの主要な伝本には全くない場面であるので、ここでの細かな検討からは除外することにしたい。その他の(4)(5)(6)の場面については、諸本間にはほぼ共通した記述が有るということを、まず確認しておきたい。

さて、(4)大納言結婚の部分であるが、成田本によって本文を引用しよう。

・一人おはするこそ心くるしけれとて、大将のおはに、たひの御方ときこゆる人を、あはせ奉りて、昔より良き様にそおはしける。(成田本)

また、藤井本・契沖本には次のようにある。

・さて、一人おはすべきにあらず、いたはしとて、大将のおはに、たいの御方と申人にそ、住ませ給ける。(藤井本・契沖本)

右に引用した三本とも、大納言の結婚相手は、「大将のおは」で「たいの御方」で一致している。伝本によっては、「大将とのゝおはこたいの御方」(国会本・京都本・光蓮寺本)・「大将殿へおはこたいの御方」(浅野本)・「清水本はこの部分に脱字あり」・「大将殿のをはにておはしましける人」(白峰寺本)・「おほみ殿の御いもうとに、たいの御方とて、いみしくおはしける人」(神宮文庫本)など、表現が少しづつ異なっている。しかし、国会本以下神宮文庫本までの諸本は、既に述べてきたように、改作の程度が激しく、本文に信頼が置けない。それにしても、それらの諸本の記述が、他の主要な諸本に比してもほぼ同様の内容となっていることから裏づけられるように、藤井本・契沖本などを中心とする(4)

の場面の記述は、『住吉物語』においてまず動かないところである。

ところで、成田本の傍線部Aの記述であるが、主要諸本の中では、成田本のみが持つ表現である。しかし、大納言が再婚することで昔より榮えるという表現を持つ伝本は多く、国会本・京都本・光蓮寺本・浅野本・清水本・白峰寺本などは殆ど同じ記述を有し、徳川家本・横山本・真銅本・野坂本・神宮文庫本・陽明文庫本なども、表現にかなり違いはあるものの、ほぼ同趣の内容を含んでいる。この事實は、藤井本以下の諸本と成田本との本文間の系統の違いを示すとともに、成田本が国会本以下の多くの諸本と関連を持つ本文であること、あるいは成田本の影響の下にそれらの諸本が成立していったのではないか、という推定の可能性を暗示しているようにも思う。

以上の内容に続く(5)「人々継母を去る」の場面は、程度の激しい改作が認められる岩瀬文庫本・横山本・真銅本・野坂本などの諸本以外の伝本には、殆ど共通して記されている内容であるので、細かな考察は省くこととする。

続く(6)「関白の喜び」の部分には、主要伝本の質を窺う要素がある。藤井本では次のように語られている。

関白殿より初めて、よろつの人々、ゐ中の人の娘と知り給つる程に、はや、あせちの大納言殿の宮腹の御娘とて、さもありがたき仲らひとて、人々も言ひあひけるとかや。(藤井本)

姫君が大納言の娘であることを関白が知り、願ってもない仲らいと喜び記述は、総ての諸本に認められ、『住吉物語』には欠かせない要素であった事が判る。ただし、引用した藤井本の傍線部分の表現は、「表」を一覧すれば判るように、主要伝本と考えられる古活字十行本・益田本・住吉神社本などを初めとして、その記述を持たない伝本も多いのである。古活字十行本などでは、その最後の表現を、「わざともかゝる様にこそ侍るへけれど、喜びあひ給へり」と、「人々」の語句を省くなど、微妙に違いを見せている。僅かな相異ではあるが、それが契機となつて、「ふたところなから、御喜び限りなし」などと、関白夫妻の喜びのみを記す表現が光蓮寺本・浅野本などに生まれてくるのである。そのようなプロセスを

想定すれば、主要伝本の中でも、藤井本・契沖本・成田本の諸本は、『住吉物語』の本文を考える時、やはり重要な伝本であると言わねばならず、同時に、古活字十行本以下香取神社本までの比較的類似した本文を持つ諸本のグループも、複雑な転写過程をたどっているということが判ってくる。

#### 六、兵衛すけ、中の君を去る。姫君、中の君・三の君を関白邸に迎える

『住吉物語』も終末に近付き、速いテンポで場面が切替わって行く。ここでは、継母の策略を知った兵衛すけが、妻・中の君の許を去り、悲嘆にくれる中の君・三の君を、姫君が自邸の関白邸に迎え、姉妹の最終的身の振り方が決定していく展開について検討を加えたい。

例によって、まず「表」を一覧すると、いつもながら改作の激しい岩瀬文庫本・横山本・真銅本・野坂本・白峰寺本・神宮文庫本・陽明文庫本の七本を除くと、他の諸本は殆ど共通した物語展開を見せていると理解してよい。ただ、その中でも細かく見ると、主要伝本にも多少ずつ本文が変化しているところが目につく。「表」で見ると、ここでも成田本・藤井本・契沖本を中心とする本文の変化が、伝本間の異同の鍵を秘めているようである。以下、細かく見ていこう。

まず、(8)「兵衛すけ、中の君を去る。姉妹の嘆き」の場面の本文を、成田本によって引用してみよう。

・この事をきゝて、兵衛のすけも、中の君のもとへ離れ／＼になりにけり。さるまゝに、中の君・三の君も、親ながらも疎ましき事をし給たればとて、人の遠ざかるも理りとて、二人なから音をのみそ泣き給ける。(成田本)

横山本・真銅本・野坂本の三本を除く諸本がみな有している記述である。ただ、傍線部分から三の君が消えて「中の君」一人の嘆きとしている諸本に、藤井本・大阪中之島本・古活字十行本の主要伝本と、東京教育大本・白峰寺本とがあることは見逃せない。実は、先に見た、(2)の姫君の無事を喜ぶ場面でも、藤井本を初めとする多くの諸本では、中の君一人の言動として記していたのであった。藤井本・古活字十行本・白峰寺本などが、ここでも中の君一人の悲観として描くのは

その意味では当然の事であり、その場面で姉妹の喜びとしていた成田本・契沖本・清水本がここでも姉妹二人の思いとしているのも、また筋が通っている。ただし、(2)場面で中の君一人の思惟としていた伝本のうち、この(8)場面では姉妹二人の思いとしているものには、住吉神社本・香取神社本・益田本・御巫本・光蓮寺本・書陵部本・国会本・京都本など、相当数のほり、言わば数の上では、このグループが主流を占めているのである。逆に、(2)場面では姉妹が登場していたのに、この(8)場面での君一人となるものには浅野本・東京教育大本がある。

これらの結果から、直ぐに諸本の系統が判明するなどという簡単なプロセスを見出だし得るほど単純な諸本間の異同ではないが、先述したように、少なくとも藤井本・成田本・契沖本などには、中の君・三の君姉妹に寄せる一貫した人物像が有ることである。しかし、藤井本は中の君一人を、成田本・契沖本は姉妹二人を登場させるという相異がここには有るのであって、この内容の差が、その他の伝本の記述の揺れをもたらしたと考えることができる。当然、その逆に、揺れている本文が本来の『住吉物語』の記述であって、それに一貫した視点を与えて整理した本文が藤井本・成田本・契沖本などの諸本であるという可能性もある訳だが、それはそれらの諸本の性格からして考えにくい。やはり前者のように推定するのが妥当であると思う。

さて、(9)の場面であるが、ここでは主要三本がそれぞれに微妙に異なる本文を持っている。成田本によって引用しよう。

・姫君、この由をきゝて、睦まじかりし人／＼なれば、迎へ奉りて、過ぎにしかたのことゝも語らはんと給へは、大将も、よき事なりとて、迎へ奉りて我が親子の如くに思ひて、とかく扱ひ給ける。(成田本)

藤井本・契沖本の本文も引いてみよう。

・姫君、此由を聞給ひて、睦まじかりし人なればとて、迎へ奉りて、過にししかたの世の不思議なる事共、語らひあかし暮らしけり。大将も、よき事とて、大事のことにそ思ひ給ける。(藤井本)

・姫君、此由を聞給ひて、睦まじかりし人なればとて、迎へて、過にししかたの世

の事ともを、語らひあかし暮らし給ひける。大将もよきことゝそ思ひ給ひける。(契沖本)

右の三本の記述で主な相違は二点ある。一つは、成田本では大将の同意を得て、姉妹が迎えられているのに対して、藤井本・契沖本では、姫君の意志で姉妹を迎えた後で、大将も賛同している事である。もう一点は、大将が、成田本では「我が親子の如く」、藤井本では「大事のことに」それぞれ姉妹を扱っているとの表現があるが、契沖本にはその記述が無いことである。

この内容の違いを、他の諸本と比べてみると、「表」で明らかのように、藤井本と同様の記述を持つ伝本には、大阪中之島本・古活字十行本以下の五本がある。これらの諸本は、既に見てきたように、質的にかなり信頼の置ける本文を持つ伝本であった。また、成田本と殆ど同じ内容のものに、書陵部本・東京教育大本がある。書陵部本は古活字十行本などの諸本にかなり類似した本文を有した伝本だが、東京教育大本は相当に変化に富んだ記述を持っていたことは既に論じてきた通りである。そのような中に契沖本を置いてみると、今回調査しえた諸本中には、契沖本と同様の表現構成を採っている伝本が無いことに注目される。はたして、この契沖本の存在をどのように位置づけたらよいであろうか。

一つの方向として、光蓮寺本にある表現、

・内大臣の上、この由をきゝ、睦まじかりし人なり、迎へ取りて、過ぎにしかたの事とも語らんと給へは、内の大い、けにと許し給ひける。二人迎へ給ひつゝ、我が御子のやうにて、かしつき給ふ。(光蓮寺本)

が参考になる。同様の内容は、国会本・京都本・浅野本・清水本・御巫本・岩瀬文庫本などにもあって、諸本の中では比較的多い本文なのである。そして、記述の構成は、成田本と極めて類似している。ただし、成田本には無い「二人迎へ給ひつゝ」という語句が加わり、「親子の如くに」が「御子のやうにて」と変わっている。親子も御子も、結局は同じ事を言っているのではあるが、「我が親子」はここでは自然ではない。また、「姫君」が「内大臣の上」となっている。大将が、(7)の場面で内大臣になるという設定は光蓮寺本の他に国会本・京都本・浅野

本にのみあるが、内大臣という設定は改作によって加えられたものであることは明らかだ。それらの事柄を勘案すると、光蓮寺本などは成田本の影響下に成り、成田本の語句を判り易く改めたのが光蓮寺本以下の諸本ということになるであろう。更に突き詰めれば、その成田本は藤井本から、その藤井本は契沖本の表現から出ている、というふうに考える事が可能となる。それは、「迎へ奉りて」の語句が示すように、成田本は藤井本と同じ表現を持っているが、光蓮寺本などの関連からして藤井本以前には置きがたいこと、また、契沖本は藤井本の後には生まれない本文であることによる。少なくとも、この場面に關してはそのような推定が可能である。

勿論、既に述べてきたように、その逆の方向が考えられる場面もあった訳で、『住吉物語』の伝本は、予想以上の複雑な経路をくぐって今日に及んでいる事は承知している。しかし、たとえ一場面でもこのような推定が成立するとすれば、契沖本の位置、及び成田本・藤井本の系譜を考える手掛かりが増えることになる。

#### 七、大將は関白に、姫君は女御となる

さて、『住吉物語』も大詰めを迎え、大將・姫君その他の人々が、それぞれ思うがままの世を迎える。ここでは、(10)「大將は関白となり、若君元服」・(11)「姫君、女御となる」・(12)「侍従、内侍となる」という、一連の三場面について考察を加えてみたい。

最初に(10)の場面だが、「表」に従って一瞥すれば直ぐに判るように、主要諸本は二つの方向に別れている。一つは藤井本・契沖本及び大阪中之島本以下のグループの諸本群である。もう一つは、成田本と書陵部本以下の本文である。この二つの方向によって、大きく諸本が二分されていると言っても過言ではない。そして、成田本の構成要素を、(それぞれ要素を記述する順序には違いは有るものの、姫君が北の政所と呼ばれるという表現を)主要伝本を除く殆どの諸本が襲っているという、実に明確な傾向が認められる。それら以外には、国会本・京都本・光

蓮寺本・浅野本・横山本・神宮文庫本・陽明文庫本はそれぞれ独自の改作が施されている。その中で、大將が既に内大臣となっていて、その内大臣が関白となるという記述が、横山本以外の六本にあるということは、それぞれ改作の激しい諸本間の関係を窺う上で、興味ある事実である。一方、真銅本・野坂本・白峰寺本には、この場面の内容が全く記されていない。真銅本・野坂本の改作姿勢については既に述べたことがあるのでここでは触れないが(注6)、(11)の場面では姫君が若君・姫君を出産したことがこれらの二本のみに記されているなど、一途に姫君中心に展開するプロットを、この三場面では保持しているのである。

さて、(10)から(12)の場面であるが、成田本の本文を、まず引いてみる。

・かくて、年月過ぎ行く程に、大將に、父の関白譲りて、いよく榮えてそありける。若君は男になりて、三位中将とそ申ける。姫君は十八の歳、女御に参り給けり。侍従はおとなになりて、侍従の内侍とそ、世の人にきく俤はれける。住吉の姫君は、北の政所と言はれける。(成田本)

次に、藤井本の本文を記してみよう。

・年月ゆく程に、大將殿には、父関白譲り給ぬ。いよく末の世頼もしく侍ける。若君は、元服せさせ給て、三位中将とそ申しける。姫君は十八にて、女御に参り給ける。侍従はおとな女にて、よろづに大事の人に思われて、内侍に成ぬ。見聞く人、羨みあへり。大將・姫君、末まで繁盛して、目出度そおしける。(藤井本)

このように、藤井本は、数箇所の記事で成田本と異なる所がある。契沖本の本文は、藤井本に比較的近い。ここで取り上げる場面の内容は、成田本・藤井本の記述ではほぼ理解できる。そこで右の表現からポイントとなる四箇所の記事を以て、諸本の比較を試みると、次のようになる。

・姫君十八歳で女御となる・侍従おとな女となる・よろづに大事の人と思われる  
大將姫君は末まで繁盛——藤井本・大阪中之島本・古活字十行本・益田本・住吉神社本・香取神社本

\*十八歳・おとな女・又なき人・末まで榮える——契沖本



\*十八歳（清水本は后）・おとな・聞き惚ばれる・（ナシ）——成田本・清水本  
 \*十八歳・（ナシ）・宮中に仕える・（ナシ）——徳川家本  
 \*十八歳・おとな・重き人と思う・（ナシ）——東京教育大本  
 \*十七歳・おとな・世の人重く思う・（ナシ）——国会本・京都本・光蓮寺本・浅野本

以上のように分類される。この他にも幾箇所か類似した記述を持つ伝本もあるが、異同が激しい為に、比較は意味をなさないので省略する。

右の比較を通して判ることは、主要諸本の殆どが、藤井本と全く同じ記述を持っているという事である。それは今回調査し得た諸本に限っての事であり、まだまだ未見の伝本が数多く有る中では明言を避けるべきではあろう。しかし、一方では真銅本・野坂本・白峰寺本・神宮文庫本・陽明文庫本などといった改作の激しい諸本が削除している記述を、藤井本系統の諸本がきちんと保持していることは重大であり、おそらく『住吉物語』が本来有していた記述と考える根拠と成りうると思う。それは藤井本一つの存在意義を高めるということに留どまらず、古活字十行本以下の諸本の伝本の価値にも拘わるからである。

そのような状況の中で、成田本の存在はどうかというと、ほぼ同趣の表現が清水本に見られるものの、清水本では女御ではなく后と記されていた。また、侍従の事が人々に聞き惚れるという記述で一致するものに書陵部本・岩瀬文庫本が有るが、書陵部本には女御の年齢がなく、岩瀬文庫本では十六歳となっているなど、異同の激しい伝本であると言える。それらの伝本と類似表現を持つという点で、成田本の質の一端も窺われる。藤井本と並んで、成田本は従来から重要視されてきた伝本なのであるが、ここまでの論述を通して、藤井本とは質的に異なる本文を多く有している成田本の性格が、かなり明らかになった事と思う。同時に、改作が行われている諸本に及ぼした影響の大きさ、という点で評価すべき伝本という側面を見ているということでもある。

ところで、契沖本の位置であるが、場面の構成は藤井本などと殆ど同じである。しかし、この場面に於いては、細かな部分まで一致する伝本は他になく、契

沖本は孤立した存在となっている。そのために比較のしようが無い。だが、大将・姫君が未まで栄えた、とする表現は、未まで繁盛したとする藤井本系統の表現よりは、やや古態に属するようにも思われる。前稿に於いて、契沖本は、藤井本などと比肩し得る系譜上の位置にあること、更には、それ以後の諸本に及ぼした影響の大きさが窺えることなどを帰納的に考察してみたのであるが（注7）、ここでもその問題が浮上している。現存している諸本は、殆ど総てが後人の手が入ったものであることは、極めて複雑に交錯する本文を総ての諸本が含み持っているというのを見ても、論を待たない。当然、契沖本も同様なのであるが、少なくともこの場面に於いては、藤井本などに先行する本文を持っているように思われる。このことは藤井本の質を理解する上にも考慮すべきことである。

#### 八、継母、人々に疎まれて死亡。情を心につづべきを説く

(13) 継母人々に疎まれてついに死す・(14) 継母の供養をする人なし・(15) はせ観音の御利益・(16) 人々に情あるべき事を説く、という物語最後の一連の場面へと進みたい。

まず、「表」を一覧すれば判る最大のポイントは、諸本の多くが、成田本と殆ど同じ構成要素を保有しているということである。このことは、これらの場面において特筆すべき事柄である。そしてまた、成田本は、おおくの部分で藤井本・契沖本とは構成要素を異にしており、藤井本などと極めて近い本文を持っていたはずの古活字十行本以下の主要グループの諸本も、ここでは成田本と歩を一にする部分が目につくのである。つまりは、殆どの諸本が、成田本に引つ張られた形を成しているということである。あるいは、成田本もそれら諸本の一つに過ぎず、成田本のみを特別視することが誤りだという見方もあろうが、既にこの論で取り上げた場面の前半において度々指摘してきたように、成田本は藤井本・契沖本などと同趣の表現を持つところも多く、他の諸本に埋没させてしまうことは正しくない。やはり、成田本を多くの諸本に先行する本文を有する伝本として見てゆくのが妥当である。

諸本間の異同があまりにも激しいために、それぞれを細かく比較検討することは、ここでは不可能なので、成田本と藤井本・契沖本との性格を考える上で重要な二点に絞って、論じてみたい。

まず一つは、(13)の場面で、継母が人に疎まれ、寂しく死んでゆき、誰もその供養をする者がいないという、継母の報いを成田本では強調していることである。

藤井本・契沖本などでは、その辺りはさらっと書き進めているのだが、成田本はかなり執拗に追及している。さらには、継母の死の後で、むくつけ女にまで死を与えている。また、継母の供養をする者もないとする場面もあり、極めて徹底した展開の方向を取っている。『落窪物語』のようなおおかさとユーモアは無いが、徹底ぶりでは『落窪』に優るとも劣らない。しかも、それらの記述の多くは、そのまま他の諸本にも受け継がれているのである。書陵部本その他の諸本、わけても徳川家本以下の諸本の異同の激しさと比べるべくもないが、藤井本・契沖本などと比較して、成田本のこの記述の相違は、成田本の本文の質と、他の諸本との関連を窺わせるに充分である。

もう一点は、(14)の場面で、成田本は「はせ観音」のあらたかな霊験を説いていることである。これも藤井本・契沖本を初めとする主要伝本には無い記述であって、注目される。しかし、国会本以下の諸本の殆どには記されている。成田本がはせの観音信仰と関連した要素を持っているということであるが、中世の物語であれば、それは当然とも言えることであって、むしろ逆に、その記述を含まない藤井本・契沖本の本文の方に注目したいのである。

物語の末尾で、藤井本・契沖本は、

・昔も今も、人に腹くるなる人は、かゝる事なり。これを見聞かむ人々は、かまひて人よかりぬへきなりとぞ。(契沖本「かまへて」「なりとて申伝へける」)(藤井本)

と終わっているのに対して、成田本は、

・今も昔も中頃も、はせの観音はしるしあらたにおはします。情ある人は、行く末はる／＼と栄えめてたし。心悪しき者は、目の前に枯れ失するものなり。

り。(成田本)

とあって、最後まで「はせ観音」の霊験で締め括られている。

また、それに続く「情ある人は……」の表現も、藤井本・契沖本と比較して平易なものとなっている。しかし、大阪中之島本は藤井本・契沖本と同じ記述であるが、その他の古活字十行本から香取神社本までの主要伝本の四本は、以上に見た成田本と藤井本・契沖本との両方の記述をほぼ合わせ持つ内容となっているのである。この現象は、これまでに推定してきた成田本・藤井本・契沖本のそれぞれの本文上の性格を裏付けてくれる。

#### 九、成田本・藤井本・契沖本の位置

『住吉物語』の終末部分を取り上げて、諸本の関係について、本文の比較を通して論じてきたわけだが、冒頭にも記しておいたように、諸本間の系譜を明らかにする決定的な方法論とその根拠を模索するのは至難のわざである。繰り返し本文を読み込みながら、契沖本が藤井本と比肩し得る本文の質を見せるところが少なくないこと、また、藤井本とともに注目されていて、ほぼ藤井本・成田本を押さえておけば『住吉物語』の内容はよいのではないかと言われている成田本にしても、藤井本および契沖本と比べても異同が多く、むしろ激しい変化を呈するに至った諸本の改作に対して、その契機を与えた部分が少なからず認められた。特に物語末尾においてはその観が強い。つまり、成田本は、確かに祖本に近い本文を有する部分が多いと思うが、同時に、契沖本・藤井本との三本の間に生じた表現の違いが、その後の諸本に重要な影響を及ぼしている位置にある、という点が注目されてよい。その意味では、現存する諸本中にある「祖本的」存在の一翼を担う結果となっている。

今回の論に於いて、契沖本については前稿を継承するつもりで、また、成田本については、藤井本・契沖本との関連で、以上に述べた観点から、諸本中における系譜上の位置を、可能な限り詰めてみたいという思いで述べてきた。この論で、それらの本文の質を十分に証明し得たとは言えないが、一つの方向は推定し

得たように思う。また、異なった場面を検討すれば抱いていた方向が、いとも容易に覆されるというところが『住吉物語』には無いとも限らないが、唯一の方法とも思われるこうした細かな比較分析から帰納することで、ここに推定し得た方向を、今後はもうすこし総合的に、かつ確かなものにしていきたい。

(注1) 豊島秀範『住吉物語』『契沖本』の系譜上の位置(『弘学大語文』弘前学院大学国語国文学会・一九八五年三月)の論に於いて、契沖本の本文が、藤井本・成田本の本文に極めて近い記述を持ちながらも、それ以降の改作本に及ぼした影響の大きさを指摘した。

同『住吉物語』諸本論——姫君の家出の場面を中心に——(『弘前学院大学・短期大学紀要』第二号、一九八五年四月)では、『住吉物語』の古態を多く留めているとされる藤井本・成田本・契沖本の関連について、諸本の中心に有るのは藤井本・成田本であるが、三本の関連でキーポイントを握っているのは、この場合に関しては契沖本であること、及び、成田本の本文には、藤井本・契沖本と異質の要素も有って、多少疑問が残る事を指摘しておいた。今回の論も、それらの問題を継承して論じている。

これらの論に関して、三角洋一氏より、「論のニュアンスでは、流布本系の某祖本から一方的に中間的な諸本、さらに広本へと肥大展開していくように解され」るが、はたしてそのように捉えてよいものかどうか、との私信によるご指摘を戴いた。原『住吉』のおおよその内容は知り得るものの、現存する諸本の中から祖本を究明することは極めて困難な状況下で、成田本・藤井本・契沖本などを「祖本」とは述べていない。ただ、それらの伝本が「祖本」に極めて近い本文を有しているとの実感は、(従来から言われてきたことではあるが)現段階では相当に強い。さらに、それらの諸本が(特に契沖本が)他の多くの伝本の改作に多大の影響を及ぼしたのではないかと推論を試みたわけだが、この点に関しては、ご指摘の通り多くの問題を含んでいるので更に考えてみたい。

(注2) 桑原博史氏『住吉物語諸本解題』(『中世物語研究——住吉物語論考』)、二玄社一九六七年。

(注3) 今回使用した諸本の出典は、「大阪中之島本・住吉神社本・香取神社本・光蓮寺本・浅野本・清水本・御坐本・岩瀬文庫本・白峰寺本・神宮文庫本」の一〇本は、国文学研究資料館のマイクロフィルムに収録されている「山岸文庫」の本文を用い、「益田本」は同じく国文学研究資料館のマイクロフィルムによる益田勝実氏蔵本によった。また、「国会本・住吉神社本・東京教育大本・契沖本・書陵部本・真銅本」は、桑原博史氏(注2)同書所収の本文を用い、「成田本・藤井本・横山本・京都本・古活字十行本」は、横山重校訂『住吉物語集(本文編)』(鎌倉時代物語集一・大岡山書店刊・一九四三年)により、「徳川家本」は、磯部貞子著『尾州徳川家本・住吉物語とその研究』(笠間叢書四九・一九七五)を用いた。また、「白峰寺本・神宮文庫

本・野坂本」は、友久武文編『広本住吉物語集』(中世文芸叢書一一・広島中世文芸研究会・一九六七)により、「白峰寺本・陽明文庫本」は、高橋貞一編『住吉物語』(文芸文庫・日本古典文学一・勉誠社・一九八四)によっている。ただし、出典の重複している本文は、適宜比較して使用した。

(注4) 豊島秀範(注1)同論文。

(注5) 豊島秀範『住吉物語』試論——年立上の期日と改作姿勢——(『弘前学院大学・短期大学紀要』二〇号、一九八四年三月)真銅本の改作姿勢とその方向について論じてあるので参照していただきたい。

(注6) 前掲(注5)同論文。

(注7) 前掲(注1)同論文。